

# 鶴岡（山形県）と弘前（青森県）における市民の果物観の比較調査

—カキに対する意識を中心にして—

平 智

山形大学農学部 997-8555 鶴岡市若葉町

## A Comparative Survey of People's Preferences for Fruits (Especially for Persimmon) between Tsuruoka (Yamagata Prefecture) and Hirosaki (Aomori Prefecture)

Satoshi TAIRA

Faculty of Agriculture, Yamagata University, Tsuruoka, Yamagata 997-8555

### Summary

To investigate how people's preferences for fruits, especially for persimmon, differ in different regions and in different age groups, a questionnaire survey was conducted in Tsuruoka City in a persimmon production area and in Hirosaki City in an apple production area. Group of 500 people from each city were randomly selected using the electoral register books. The recovery rate for collection of questionnaires was about 40%. Three major findings came out of the survey. The first finding was that the most favored fruit was the apple and the 6 most preferred fruits were the same in both cities. The second finding was that people in Tsuruoka preferred persimmon as an autumn fruit. In contrast, people in Hirosaki tended to choose apple, probably reflecting the production areas of each fruit. The third finding was that people's image of persimmon trees provided a feeling that autumn really has come was common in all age groups in both regions.

**Key Words:** fruit, persimmon, preference, questionnaire, sense of the seasons.

### 緒 言

カキはわが国の気候風土に最も適した果樹のひとつで、現在南北海道から九州に至る広い地域に分布しており、各地に多数の在来品種が発達してきた（山田，1998；平，1999）。現在の主な品種は、奈良あるいは平安時代に中国から導入されたものがもとになっていると考えられている（山田，1996）。したがって、カキは1,300年以上もの長い間私たちに親しまれていることになり、日本人が古くから親しんできた最も身近な果樹のひとつであるといえる（傍島，1980；今井，1990）。

しかし、近年、農村地域の都市化や宅地化が進み、里山の周縁や畦畔、家の庭先などから、カキをはじめとする身近な果樹が急速に減少している事実が観察される。このような状況の中で、人とカキとのかかわり方や人々の果物観の現状はどうか、あるいはどう変化しつつあるのでしょうか。また、カキは日本の秋を代表する果物としてしばしば取り上げられるが、カキに対するこのよう

2001年5月16日受付。2001年7月30日受理。本報は人間・植物関係学会2001年大会（2001年9月，兵庫県）において発表した。

な意識は地域や世代にかかわらず共通しているのであろうか。

本調査は、果物と人とのかかわりの現状を明らかにし、そのあるべき姿について考察するための手始めとして、カキの産地である山形県鶴岡市とリンゴの産地である青森県弘前市を比較しながら、カキを中心とした人々の果物観の一端を明らかにしようとしたものである。

### 調査方法

#### 1. アンケート調査の方法

山形県鶴岡市（人口約10万人）と青森県弘前市（人口約17万人）の市役所に保管されている選挙人名簿から、それぞれ500人ずつを以下のような方法で抽出した。

選挙人名簿には、鶴岡市が約75,000人、弘前市が約135,000人の住所・氏名がそれぞれの居住する町別に記載されていたので、両市とも抽出される人の性別や居住地域に偏りが出ないように配慮しつつ、20～29歳、30～39歳、40～49歳、50～59歳、60～69歳および70歳以上の六つの年代グループに分け、各年代からそれぞれ82～84人を無作為に抽出した。

このようにして抽出した両市の合計 1,000 人に対して、辻・有馬(1987)のアンケートの郵送方法と回収率に関する記述を参考にして、次に述べるような内容のアンケート用紙 (B 4 判 1 枚) を、切手を貼った返信用封筒を同封して直接本人に郵送した。アンケートは 1998 年 9 月中旬に発送し、締切りを同年 10 月末日とした。

## 2. アンケート調査の内容

アンケートは各々の質問に続いて回答を選択するか、回答欄に自由に記入してもらう方式をとった。

まず最初に、庭先などの身近にある果樹についてその種類や本数などを聞いた。さらに、この質問に対する答えにカキが含まれている場合は、それらの甘渋の別や品種名などについてもわかる範囲で答えてもらった。

次に、好きな果物を順位をつけて三つあげてもらった。また、秋を感じる果物を二つまで、順位をつけて答えてもらった。

さらに、カキの樹 (とくに色づいた果実のなっている樹) に対して抱くイメージについて聞いた。答えは、①懐かしさを感じる、②秋を実感する、③食べたいと思う、④とくに何も思わない、⑤その他 (自由記入) の 5 選択肢から複数選択を可能として選んでもらった。

最後に、カキの多面的利用法に関する知識について質問した。この質問は、材や葉を含むカキのさまざまな利用法をあげ、そのなかで知っているものを答えてもらう方式で行った。

## 調査結果および考察

アンケートの回収率は、鶴岡が 42%、弘前が 40% であった。両市とも 20 歳代と 30 歳代の回収率がやや低かった (第 1 表)。

### 1. 好きな果物

わが国のカキ産地の北限であり、近郊にニホンナシやオウトウ、リンゴなどの生産地域を擁するとともに、カキが市の木に指定されている鶴岡では、家の庭先など身近にある果樹の 1 位は予想どおりカキで、以下、ウメ、イチジクと続いた。これに対して、周囲をわが国有数のリンゴ産地に囲まれ、その他の種類の果樹の栽培がほとんどみられないといつてよい状況にある弘前ではブドウが 1 位で、カキ、ウメがこれに続いた (データ略)。弘前ではリンゴが上位にあげられるのではないかと予測されたが、庭先にある例はそう多くないようであった。

好きな果物の 1 位にあげられたのは、両市ともリンゴであった。鶴岡では 2 位にニホンナシ、3 位にカキをあげた人の割合が高かった。一方、弘前では 1 位のリンゴに続いて、2 位と 3 位にはカキをあげた人が多か

った (データ略)。

上記の 1~3 位の順位を無視して、好きな果物を 3 種類あげてもらったものとして全体を集計すると、両市ともに、リンゴ、ニホンナシ、カキ、ブドウ、ミカンおよびモモが上位 6 位までを占めた (第 1 図)。鶴岡ではリンゴ、ナシおよびカキがほぼ同じ割合で 1~3 位を占めたのに対して、弘前ではリンゴをあげた人が全体の約 25% にのぼった。

また、3 位までの果物について回答者の年代別の割合をみると、両市とも 20 歳代から 40 歳代の比較的若い年代の人がカキをあまり好まない傾向が認められた (好む人の割合は 50 歳以上の人の平均が約 20% であるのに対して、40 歳以下の人の平均は約 10% であった)。

これらのことから、鶴岡と弘前とでは身近に感じている果樹の種類はやや異なっているが、果物そのものに対する嗜好性にはほとんど差がないものと思われた。ただし、鶴岡でニホンナシを好む人の割合が高かったことや弘前でリンゴを好む人の割合が高かったことは、鶴岡から約 30 km 近郊にニホンナシの生産地域があることや弘前周辺の町村はほとんどがリンゴ産地であることから考えて、それぞれの地域の地域性をよく反映しているものと考えられた。

### 2. 秋を感じる果物

秋を感じる果物を順位をつけて 2 位まで聞いたところ、鶴岡では回答者の約 60% が 1 位にカキをあげた。2 位にもカキをあげた人の割合が高かった。一方、弘前では 1 位にリンゴをあげた人が、カキをあげた人よりも

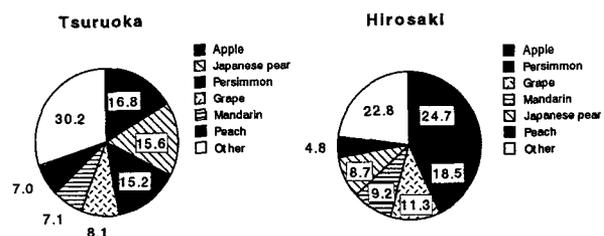


Fig. 1. People's favorite fruits in Tsuruoka and Hirosaki. Numerals in figure represent the total proportion of the three most favored fruits of each group (%). (Tsuruoka, n = 210 × 3 = 630; Hirosaki, n = 200 × 3 = 600).

Table 1. The number of respondents and the recovery rates for the questionnaires.

	Age						Total
	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-	
<b>Tsuruoka</b>							
Male	10(24.4) <sup>z</sup>	11(26.2)	11(26.2)	15(36.6)	16(38.1)	22(52.4)	85(34.0)
Female	15(35.7)	15(35.7)	26(63.4)	28(66.7)	21(51.2)	20(46.7)	125(50.0)
Total	25(30.1)	26(31.0)	37(44.6)	43(51.8)	37(44.6)	42(50.0)	210(42.0)
<b>Hirosaki</b>							
Male	10(23.8)	10(23.8)	15(36.6)	14(32.6)	16(39.0)	27(65.9)	92(36.8)
Female	10(24.4)	17(40.5)	21(48.8)	22(56.4)	19(44.2)	19(45.2)	108(43.2)
Total	20(24.1)	27(32.1)	36(42.9)	36(43.9)	35(41.7)	46(55.4)	200(40.0)

<sup>z</sup> Numerals in parenthesis are the proportion of collecting recovery (%).

わずかに多かった。2位にはカキをあげた人が多かった(第2図)。

これらの1位、2位の順位を無視して、秋を感じる果物を2種類あげてもらったものとして集計すると、両市ともカキ、ニホンナシ、ブドウ、リンゴおよびクリの5種類が上位を占めた。両市ともカキが1位であったが、2位は、鶴岡ではニホンナシ、弘前ではリンゴと異なった。ブドウとクリをあげた人の割合はほぼ類似していた(第3図)。なお、両市ともカキをあげた人は年代にかかわらずほぼ同じ割合であったが、それ以外の果物については年代によってかなり差が認められ、たとえば鶴岡でニホンナシをあげた人は20歳代から40歳代の人に多かった(50歳以上の平均約10%に対して、40歳以下は平均約20%であった)。

これらの結果は、好きな果物とは別に秋を感じる果物が存在しており、さらに、それらはそれぞれの地域の近くで多く生産(収穫)される果物の種類を比較的良好に反映しているものと思われた。ただし、カキだけは例外的に、地域を越えて秋を感じる果物として多くの人々に認識されていると考えられた。

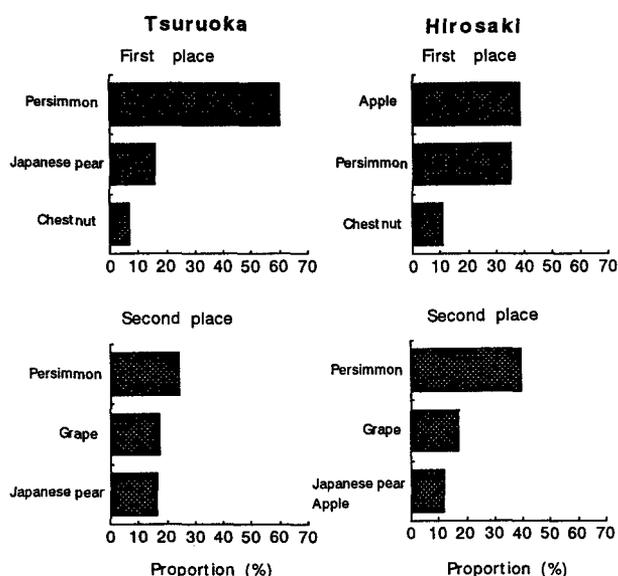


Fig. 2. First and second preferences of fruits selected for the feeling that autumn really has come. Bars in figure represent the proportion in each ranking (%). (Tsuruoka, n = 210; Hirosaki, n = 200).

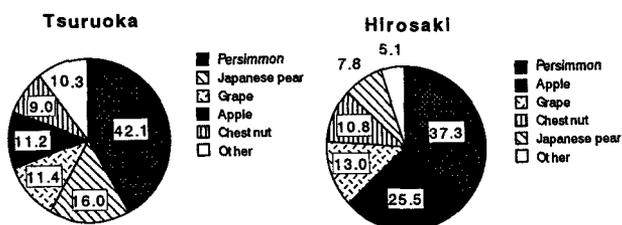


Fig. 3. Fruits that people in Tsuruoka and Hirosaki selected for the feeling that autumn really has come. Numerals in figure represent the total proportion of the first and the second choice for each person (%). (Tsuruoka, n = 210 × 2 = 420; Hirosaki, n = 200 × 2 = 400).

### 3. カキの樹に対するイメージ

「色づいた実のなっているカキの樹を見てどのように感じますか」という問い(複数選択可)に対しては、「秋が来たと実感する」という答えを選んだ人が鶴岡でも弘前でも80%以上にのぼった。次いで、「食べたいと思う」が多かった。全体としては、両市の回答はほぼ同じ傾向であった(第4図)。

回答を年代別にみてもこの傾向は大きくは異ならず、カキの樹に対して、明らかに世代を越えた共通のイメージが存在するものと思われた(第5図)。なお、鶴岡の60歳代と70歳以上の人に回答に「その他」がやや多いが、その内容は「親しみを感じる」、「豊かさを感じる」、「近親者に送りたいと思う」などであった。

さらに、カキの多面的利用に関して「干し柿」や「柿酢」、「柿渋」や「柿の葉茶」などを含む13項目について、それらを知っているかどうかを聞いた。その結果、「干し柿」の約95%以外はいずれも50%以下の認識度であり、かつ両市の間にも顕著な差異は認められなかった(データ略)。

以上のように、20歳以上を対象にした場合、居住地域や年代を問わずに、カキの樹に対するイメージに強い共通性が認められた。それは、カキを秋を感じる果物としてとらえるほかに、おそらく身近な風景のなかにあるカキの樹を見て(あるいは感じて)秋の到来を実感するというものである。

このようなイメージが20歳より若い世代の人にも共通して認められるかどうかについては興味を持たれるところである。そこで、小・中学生と高校生に対しては本アンケートとはほぼ同じ内容の質問を行った。ただし、この場合、小学生は鶴岡市内にある小学校の5年生と6年生(10~12歳)の合計128人、中学生も同市内にある中学校の2年生(13~14歳)145人、高校生は鶴岡市近郊にある高校の1~3年生(15~18歳)101人を対象とした。その結果、カキの樹に対するイメージは、「秋が来たと実感する」と答えた人が小、中、高のいずれにおいても最も多かった。しかし、その割合は、高校生が約65%、小学生が約50%、中学生が約45%で、20

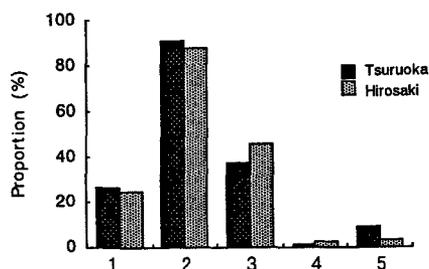


Fig. 4. Respondents, viewing image of persimmon trees in Tsuruoka and Hirosaki. 1, Longing for old sweet memories; 2, Feeling that autumn really has come; 3, Wanting to taste their fruits; 4, Not feeling anything special; 5, Other. One can choose one or more answers. Bars in figure represent the proportion in each category (%). (Tsuruoka, n = 210; Hirosaki, n = 200).

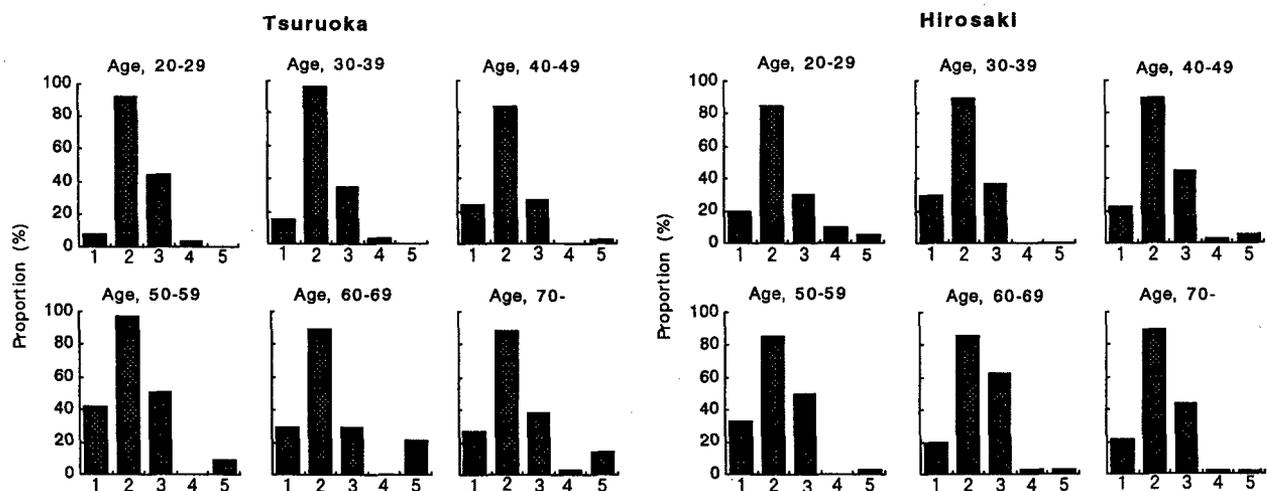


Fig. 5. Respondents, viewing of image of persimmon trees by age group. 1, Longing for old sweet memories; 2, Feeling that autumn really has come; 3, Wanting to taste their fruits; 4, Not feeling anything special; 5, Other. One can choose one or more answers. Bars in figure represent the proportion in each category (%). (Tsuruoka, n = 210; Hirosaki, n = 200).

歳以上の人と比べると総じて低かった。また、好きな果物にあげられた種類は多様で、ニホンナシやオウトウ(サクランボ)、メロンなどが上位に入った。ただし、秋を感じる果物としては、カキが小学生と高校生で1位、中学生で2位(1位はニホンナシ)であった。

これらの結果は、カキの樹に対するイメージは、世代を越えて共通してはいるものの、身近な環境からカキの樹が減少していくのにもなって、若い世代ではしだいに薄れてきつつあることを示している可能性がある。また、このような傾向が、今回の調査地域以外のより都市化されたところにおいても同様に認められるかどうか、さらに、都市部と農村部の小学生や中学生の間では異なるかどうかについて今後調査する必要がある。

多種多様な果物が商品として手に入りやすい時代を迎えて(西東, 1996)、人と果樹とのかかわり方も変化を余儀なくされている。果物と人とのかかわりが単に食品(商品)としてだけのかかわりに限定されないためにも、日本人とカキにみられる(あるいはみられてきた)ような奥行きと幅のある豊かなかかわりのあり方を再評価する必要があるのではないだろうか。

### 摘 要

カキの産地である山形県鶴岡市とリンゴの産地である青森県弘前市で、カキに対する意識を中心にして、人々の果物観をアンケートによって調査した。

両市の選挙人名簿から、性別、年代および居住地が偏らないようにそれぞれ500人を無作為に抽出し、郵送アンケート調査の対象とした。アンケートの回収率は、鶴岡が42%、弘前が40%であった。

返送されたアンケートを集計した結果明らかになったおもな点は以下の3点であった。

1. 鶴岡、弘前ともに、人々が最も好む果物はリンゴで、

好きな果物の6位までに入った果物の種類には違いがなかった。

2. 秋を感じる果物の1位は、鶴岡ではカキ、弘前ではリンゴであり、それぞれの地域の近くで生産される果物の種類を反映しているものと思われた。

3. 人々がカキの樹に対して抱くイメージは、両地域とも、また年代によって多少の差異が認められたが、総じて「秋が来たと実感する」ことであった。

以上の結果をもとに、果物と人とのかかわりについて、カキを中心にして若干の考察を試みた。

### 謝 辞

本アンケート調査の実施にあたって、専攻学生の川村道子、大槻真子ならびに牧 篤史の3氏の多大な協力を得ました。記して感謝の意を表します。

### 引用文献

- 今井敬潤. 1990. 柿の民族誌. p.7-82. 現代創造社. 大阪.  
 西東秋男. 1996. 果物の経済分析. p.22. 筑波書房. 東京.  
 傍島善次. 1980. 柿と人生. 明玄書房. 東京.  
 平 智. 1999. 伝統的食文化としてのカキ(柿)の多面的利用に関する調査研究. 浦上財団研究報告書 7:1-17.  
 辻 新六・有馬昌宏. 1987. アンケート調査の方法 — 実践ノウハウとパソコン支援—. p.94-114. 朝倉書店. 東京.  
 山田昌彦. 1996. カキ. p.227. 日本人が作り出した動植物委員会編. 日本人が作り出した動植物. 裳華房. 東京.  
 山田昌彦. 1998. カキの起源と分類. 農業技術体系果樹編第4巻追録第13号. p.107-112. 農山漁村文化協会. 東京.